



六

花

6

2022

りっかはいくかい

麦秋や内子の方に淡き星
 鳴門橋渦奔流の青葉
 不帰熟田津媛の化粧
 目を据ゑて地酒味はふ新樹の
 到着のまは句会など乾
 青葉を一つ考案中や夏の
 山頭火うつけて青葉山へ
 山頭火ここに果てしや蚊遣
 坂道を少し下ればあめんぼ
 城山へ明日は登ると雨
 三葉冷道後の坂を上り下
 青覚めの茶漬に瓜の一夜
 酔山の沖に揚げたる鯖の
 松瓜の麦味噌塗つて歩き
 瓜の味噌塗つて歩きの
 上弦の青葉の月や燧
 旧交を温めたのか青葉燧
 道後駅行き最終電車青葉
 瀬戸内の左に夕日入り
 新樹の夜外湯めぐりの下
 霊の湯に入らねば青葉臭は
 る音り月寒灘む司漬り山蛙う香る川し杯夜中潮

湯のほてり仇となりたる麦酒か
 人のよりも遅れて目覚め焼
 蚊の声を聞きしのみなり坂
 汗などは無用の我に道後の
 三十年の汗を道後に流しけ
 奥御殿跡の睡蓮ひめの
 夏鶴二之丸は恋人の聖地
 錦鯉はるかに昼のこはんか
 薔薇の山白あちこちに見通
 山頭火終焉の地や蚊遣香
 浜田さんは同級生を待つ新樹の
 新樹の夜のぼさん下駄道後
 赤シヤツも麦藁章魚を愛せし
 飛ぶように売れ伊予柑のかき
 若葉風井戸の中より人の
 実桜や厨探して右往左
 東向き西向きの子規の顔涼
 夏草や白の石垣御影
 山頭火をながなが語る暑
 青葉なす天守閣より山遠
 目の前を坊ちやん電車夜の
 熟田津は熱しと麦酒の
 山雀のしばらく鳴けり天守閣
 山雀は伊予松山の姫の
 夏つばめお城をさつと越えに
 蚊でもなし百足でもなし腕に
 疵

春遠し愚の累卵となるいくさ 善野行

(はるとおしぐのるいらんとなるいくさ ぜんのごう)
愚の累卵とは積み重ねた卵のことで、いつくずれるかわからない例え。こんなことをしていると地球規模で崩れてしまう結果になりかねない。俳句は夏炉冬扇のようだ、と芭蕉はいうが、決して戦争にかかわりないと思っっているのではないし、夏草やの句の通り、戦争を肯定してはいけないという背景があることも忘れてはいない。(六甲)

春眠や夢の出口の妻の声 谷口一献

(しゅんみんやゆめのでぐちのつまのこえ たにぐちいっこん)
春眠の句は「夢の出口」が出色。寝ざめに近い刻、夢に逢瀬の美女「卓文君・王昭君、西施、青爾桃君」などか。そこへ「はやく起きなさい！」と、妻の声。せっかくむさぼっていた夢が敗れ現実にもどる残念さが伺える。(六甲)

黄色なるゆゑに私は蝶となる 中御門 出

蝶になりたいではなく、蝶になる、と断言し、夢の戯言のように言つてのけたのが佳く、覚えやすい句になった。

「じゃあ白い蝶は？」と読者が突っ込みをいられる楽しさも。幸田露伴、「白芥子に羽もぐ蝶の形見かな 杜国」に関する論考があるが、ネットの解釈はことごとく違う。そのことはまたの機会にする。(六甲)

雪嶺抄

日の名残 ◎ 笹村 政子

登山部の募集広告山笑ふ

その中に見知らぬ一人雛の客

片肘に日の名残りある涅槃かな

ひとつとて同じ向きなき落椿

春泥を日の流れゆく真昼かな

天窓の闇ほんのりと春の星

春星のひとつ俄にまたたけり

手をやれば押し戻しくる雪柳

こぼれどき風にさらはれ雪柳

万雷の枝垂桜となりけり

▽「肩肘に」の句。肩肘とは寝釈迦のことをさしているのだろう。釈迦入滅のときの寝姿をかたどった像。涅槃(ねはん)像。寝仏(ねほとけ)。その像の肘のところに夕日がさして暮れかねているのだろう。その日は涅槃祭りで縁日などが寺の境内に出て、冬ごもりの地味な暮らしから解放され、春が来た喜びの日でもある。「日の名残」については五月号で書いた。

▽登山部の募集広告が新入生向けに張り出された。その広告を見て入部し、若い命が山に散った学生もいるし、運命が変わった人もいる。平居さんのように素敵な主人公と巡りあった人も。

▽落椿の句。写生句であるが、どれを見ても一つとて同じ向きのものがないと独自の発見。本物の写生句とはこういう句をいうのだろう。

▽春泥とは、雪解けによって地面が湿りぬかるみになったのをいう。そのぬかるみに写っている太陽が移動しているのを「流れゆく」と表現した。

▽春星の句。春は空気が湿っているから、星も何かぼんやりとしている。その星々の一つが俄かに明るく瞬いた。あれは私に何か訴えているに違いない、と感じたのである。夢風撰候補。

蒲公英 ◎ 志方 章子

旅に出む蒲公英の絮飛ぶやうに
 梅咲いてしかめつ面の綻びぬ
 熱き茶を供へむ小雪降る朝
 金色の涙こぼるるスケーター
 雛納子の行く末を案じをり
 嫁がぬ子嫁がぬでよし雛納む
 鬼やらひ声の大きな方が勝ち
 寒木瓜の赤きに胸の塞がれし
 冬灯しあはせ日記書いてをり
 立春を心新たに迎へけり

はまなす抄

姉 ◎ 升田ヤス子

往診に命伸びしと春めきぬ
 傍らに夫在れば良し雛飾る
 貝合せして雛様は伏し目がち
 這子先づ目に入る雛の展示館
 流木のはだへ明るし春の湖
 舟板の堀より梅の真白かな
 胡粉のみのこる船絵馬梅ふむ
 姫さまが佇つかと紅の枝垂梅
 猫柳堰の魚道の光りけり
 古墳かも知れぬ野阜鳥雲に

▽蒲公英の句。絮のように私も旅に出たいものだ、という願望の句。この人は大胆なところと繊細で臆病なところが同居して、それを自身でコントロール出来ない辛さがあるように思える。大江健三郎は「見る前に跳べ」という小説を書いた。「もう少し考えてから、様子を見てからなどと言っていたらチャンスはどんどん逃げていき、跳ぶことが怖くなってしまふ」というものか。大江の経験談かも。昔、私も大いに参考になった。

▽熱き茶の句。雪が振る朝は仏さまも冷えるだろうと熱い茶を供えた。優しい作者の愛情である。

▽雛納の句。子供はいくつになっても子供であれこれ心配の種は尽きない。それが母だといわれたらそうである。

▽嫁がぬ子、今は嫁がなくてもいいよ、と本人の判断に任せようという。今の時代は二度嫁いで子供が出来たら離婚してもいいよ」という風潮である。

▽「鬼やらひ」の句。節分の夜に鬼や厄を払うために豆を打つ。豆は魔を滅する意味があり、日本人は行事のほとんどがダジャレである。

▽寒の時期に咲くボケの花は紅色が濃く、美しく園芸品種として人気があるが、自然に咲かないせいか例句にも良いものがない。章子のこの句は主観が強い。

▽往診、つまり家庭訪問医にうれしい見立てをもらった。その気分の良さが、寿命を伸ばしてくれたと春めいた気分満ちている。平凡な句であるが、正直な暖かさが感じ取れる。春めくとは春のときめきでもある。夢風撰候補。

▽雛を飾るの句、良人が居ればそれが一番いいのだと吐露する。ほかに何もいらぬのだ。

▽貝合せしていたら雛の目が伏し目がちに見えた。今まではなんとも思わなかった、という風な気持ちひな祭りらしい。貝合わせは、平安時代の物合わせの一種。左右二組に分かれ、それぞれ貝を出して合わせ、その形色・大きさ・珍しさなどの優劣を争った遊戯。貝合わせには別の意味もあるが、ヤス子には相応しくないようだ。

▽猫柳の句。猫柳が加古川周辺に見当たらないというが記憶をたどったのか。早春の輝かしい句に。夢風船侯補。

▽宮の船絵馬を見ると、胡粉だけが残る絵になっているが、その古さが梅の花との取り合わせに味わい加わって、なんとも床しいものだという。

▽古墳かも、と言う句。野阜（のづかき）は野原の中で小高くなっている所。近畿には多い。

夕映の山 ◎ 善野 行

料峭や雨に傾く高野楨

ものの芽に触れてしづかな橋渡る

鱸酒や昔ながらの新開地

芽木明りさそふ日差しとなりけり

乳臭き児を片抱きに雛飾る

きのふ雛納め了へたり山に雲

雛の間に困民党の刀傷

春遠し愚の累卵となるいくさ

夕映の山ふくらんでくる遅日

露の臺採れず椿を持て帰る

▽春遠しの句。愚の累卵とは積み重ねた卵のことで、つくずれるかわからない例え。こんなことをしていると地球規模で崩れてしまう結果になりかねない。だが俳句は「夏炉冬扇」のようだ、と芭蕉は言うが、決して戦争にかかわりないと思っているのではないし、「夏草や」の句のように、戦争を肯定してはいけないという気持ちがあることも忘れてはいけない。夢風撰。

▽ひれ酒を呑む「新開地」は、昔神戸一の繁華街で、文化の発祥の地で昭和の匂いが残る。そのかみは清盛の福原の都があったところ。

▽乳臭きの句。幼子を抱えながら雛を飾る場面を想定しての句だろうが、「片抱き」にリアリティがある。その分鑑賞して楽しむ幅が広がる。赤子の匂いは敵から身を守る匂いでもある。

▽雛の間に、の句。困民党とは自由民権運動の激化期に借金返済をめぐる結成された農民組織。秩父事件が有名。その刀傷が生々しく今も残る。

▽夕映の句、「山がふくらんでくる」という表現が佳い。

▽露の臺の句は、露の臺がまだ出てなかったから、せめて、と椿の花を妻に持ち帰ったという風雅の心。

野遊抄

紅椿 ◎ 住田千代子

鯨よりも鋭き薔薇の芽吹きかな

高枝に姿をちらり笹子鳴く

笹鳴きを追ふ山径の昏みかな

さらさらの粥を零せし雨水の日

雛飾る古稀のこの手の痩せもして

開け閉めの度に倒るる紙雛

隣り合ふ阿弥陀さまへも雛あられ

流し雛空の青さの波の上

紅椿水くぼませて落ちにけり

岩濡れて継ぎ目に紅き落椿

▽紅椿の句は、「水くぼませて」に思いを写生した。実際には椿でなくても物が落ちると水面が一瞬くぼむの当たり前だが、句を見ると読者は紅椿だけがくぼむという錯覚に陥る。紅は椿の修飾で、そんなに強い印象はないが、椿の形状がくぼませるに相応しい円錐形もその役目を果たしている。椿が落ちる時に追羽根やバトミントンのシャトルを思い浮かぶからであろう。

▽雨水の日に粥を作って食べた。その粥が「さらさら」だから、こぼれたのだろう。若い時にはそうでもなかったのに、もしかしたら手先が老いてきたのだろうかなどと不安になる。その測定に、よく小豆を塗箸で一個ずつ盆の右から左へ移すことをする。それで老化をあるていど測定でき、またその行動が脳の老化予防にもなる。筆者もよく物を零すとしかられる。

▽紙の雛人形が戸をあけてする度に倒れて縁起が悪いというのだろう。玄関の雛でもよく部屋の中にも、そういうことあるのである。

▽笹鳴きの二句も風雅な気持ちがよく出ている。俳句をしない人は何も思わないが、俳句をする人は笹鳴きに鋭く反応する。笹鳴きとは冬場のウグイスの地鳴きでチャッチャツと鳴く。

土筆 ㊦ 平居 滯子

雛の灯を家に残して通夜の席
春雷や弔句読み上げられし時
雛の間の殊更深き闇となる

青き踏む地平線なる果までも
空の青つかみとりたる花辛夷
ブローチの鈴鳴る胸に春来る
野球帽いつぱいになる土筆かな
はこべ咲くサンローランの植木鉢
軽やかに堰すべり落つ春の鶴
行きつけぬ墳の正面水草生ふ

▽野球帽にいつぱい摘んだ土筆の句。思いがけなく出会うのが春の野草。山菜取りの用意がないから、取りあえず摘むのが望外の喜び。

▽春雷の句は、弔句を読み上げられているときに春雷がとどろいた。それはあたかも死者の答辞でもあるようで作者の悲しみが届いたようでもある。が春雷は冬の終わりを告げる雷であるからそう悲しまないで、と言っているようでもある。

▽花辛夷（こぶし）の句はその白さと形状によって真っ青な青空を掴んでいるようだと感じ取った。コブシは漢字では「辛夷」で、中国名では「日本辛夷」。子どもはこぶしが由来なのにどうして拳を使わないのかと異論もあるようだが…。漢方の名から来ているとも、所説あり。

▽青き踏むというのは春に新しく芽生えた青草を踏みながら野山に遊ぶことで旧三月三日に行われていた中国の風習に由来する事で若草を踏む心地よさを思わせ、これだと地平線の果てまでも行けるような気がするというのである。広大な地平線をめざし歩くというのも滯子らしい。山だけでなく草木も笑う心地よさなのだろう。

▽ブローチの句は胸が重たいほどに沢山のブローチを飾っていることに驚嘆している。そういう人山人人に多いのかも。